

## まえがき

いまの教育では「言う」という、こんなかんたんな字でも、四年生にならないと教えません。その結果はどうでしょうか。東京都の漢字指導の実験学校の発表によりますと、この「言う」という字が、六年生になっても46パーセントの子供には、読むことさえできなかったというのです。実に驚くべき事実ではありませんか。

わたしの学級では、一年生でも、この字を教えます。そして、ほとんど全員の子どもが、読んだり、書いたりしています。実験学校の六年生以上によくできます。しかし、学校で、特別に漢字の勉強に、たくさんの時間を費やしているのではけっしてありません。では、どうして、一年生が六年生よりできるのでしょうか。

「宇宙<sup>うちゅう</sup>」という字があります。学校では、この字を、中学生にならないと教えません。ところが、習うはずもない小学校の一年生が、この字を平気で読んでいます。不思議に思って、どうして読めるのか尋ねてみますと、テレビ漫画に「宇宙船<sup>うちゅうせん</sup>」というのがある、毎日見ているので、ひとりで覚えてしまったというのです。

一年生でも、実際の生活では、このように実に多くの漢字を読んでいます。これらの漢字は、学校で教えなくても、ひとりで覚えらるるほどですから、学校でもこれを使うようにすればよいのです。ち

よっと注意して教えてやるなら、すばらしい効果が収められるはずで。「鉄は熱いうちに打て」といいます。熱いうちに打てば、かんたんに伸ばすことができますが、冷えたら、どんなにたたいても、もう、どうにもなりません。漢字学習に関するかぎり、いまの教育は、冷めた鉄を打つおろかさを行なっています。効果のないのがあたりまえです。

こういうことも、それが漢字だけの問題で済むならば、ほっともおけましょう。しかし、漢字の力が弱かったら、どんな種類の本でも、まんぞくに読めないのですから、たいへんです。理科や社会科の学習でも、まんぞくにこれを進めることができません。算数だって、問題を解くことができません。

わたしが、高校の教師から小学校の教師となり、一年生に、文部省の目標の十倍の漢字を覚えさせる実験に成功するまでの十七年もの間、この道に努力してきたのは、それが、漢字だけの問題ではなく、あらゆる学問の根本だと考えたからです。

この四月から、私の方法を始めた学校が、全国のあちこちに現れています。それらは、いずれもわたしの予想にたがわず、すばらしい成績を上げています。この方お法が、世に広く採用される日も近いことと思われま。しかし、教育は一日も休みなく行われています。一日遅れれば、それだけ失うところも少なくありません。

わたしの方法は、だれでも、どこでも行なえて、いままでの十倍も成功する方法であることは、本書をお読みいただくなら、どなたにもきっとわかりいただけると信じます。一日も早く、ひとりでも多く、この方法をとられるよう祈るしだいです。

最後に、本書が刊行できますのは、講談社の山本康雄氏・渋谷裕久氏・牧野武朗氏・鈴木邦弥氏の諸氏のお力によるものであり、ここに厚く感謝申しあげたいと思います。

1962年冬

石井 勲